

# 本興寺だより

令和二年

六月

第二一〇号

「我が門下は夜は眠りを断ち、昼は暇（いとま）をとどめ、これを案ぜよ。一生空しく過（こ）して萬歳悔ゆる（後に悔いを残す）ことなかれ」（宗祖 富木殿御書）  
緊急事態宣言が解除されたとはいえ、新型コロナウイルス感染の危惧は収まらず、社会全体の生活様式を変えていく必要に迫られています。

年の初めには想像もしなかつたオリンピックや相撲・野球・イベントなどの延期や中止。予防の為の自粛で日常生活が大きく制約され、損害を被った人も沢山います。未来（先）に何が起こるか予測できない「一寸先は闇」を正に実感した気がします。自分だけの力だけでは生きていけないこともこの自粛でよくわかります。観光地も、仕事も、娯楽も、飲食も・・・

人間は「人」の「間」と書きます。今はコロナの感染予防の三密（密閉・密集・密接）を避けるために人との間隔をあけるための「人」「間」となっています。が、「間」には交える意味があります。人間とは人と人との間で交わって助け合い、支え合って生きること



を表わしています。人と交わる以上、社会の人から受ける影響も、自分の生き方が周囲の人へ与える影響も少なくありません。その中で苦悩を感じ、また勇氣ももらえます  
人の悩みは主に①健康の問題 ②経済的なこと  
③願望の達成度 ④人間関係です。何れの悩みも最後は他人との比較が悩みを増すのです。  
「みんなが元気なのに何故自分は病气？」「隣の人は金持ちなのに我が家は？」「他の人は順風満帆なのに自分だけは？」「あの人と合わせていけない？」等です。

人は本来他人と比較できないにも関わらず比較したがるのです。そして無意識の優越感や劣等感が顔をのぞかせるのです。  
人は常に時計の秒針のように、規則正しい心を刻むわけではありません。心の高揚もあれば動揺もあります。他人との比較に翻弄されて己の人生を見失うことなかれと仏様は云われます。

人は真剣に生きている時も、真剣のつもりで案外何も考えずに惰性で生きることもあるのです。真剣に生きた時は結果がどうであれ悔いが残りにくいのですが、そうでない時は悔いが残り易いのです。「あの時こうしておけばよかった」と・・・  
過去の悔いは、未来をより良く生きるために冷静に

見つめ直すことが必要であると云われます。

「あの時どうしてこうなったか？」という心の検証をしないと、人は同じような間違いを何度でも繰り返すのだと云われます。悔いを見つめることで、自分の癖や性格、態度や行動に気付けるのだということ。気付いて考え方や生き方を修正することが次の後悔を防ぐのです。家でも傷んだ所を直せば住みやすくなるように。

日蓮聖人は、一生空しく過（こ）して死に臨んだ時に後悔する生き方をしてはいけないと述べられています。一日の終焉は夜です。一生の終焉は臨終です。日々の反省と感謝の気持ち、悔いを減らす人生への道だと教えています。「過去の悔いを改めたからこそ、今の安らぎがある」と言えるような日々を過ごしたいものです。臨終に気付いた時には空しい一生で終るのです。  
人間は身（体）行いと口（言葉）と意（心の想い）の三つで善悪の業をつくと云われます。



善き業は、相手に口で言葉をかけるだけより、身（行動）で示すのが最も通じます。悪しき業は口（言葉）で傷つけるのが一番多いのです。人がつくる悪しき業はウイルスと同じく他人に嫌な気持ちを感染させていくのです。  
不動明王は私達が娑婆世界を流転する中でつくる生死の悪業を黒で表し、鋭い形相と剣を持って、悪事と煩惱を切り、己の魂の本質に目覚めさせる使命を持っています。また「生死即涅槃」ということを示しています。生死即涅槃とは、苦と楽は表裏一体であることを教え、人生は苦しみの闇を通して楽しみの明るさに至る道であることを示しています。

各々に与えられた試練の闇を抜け出す鍵は、何事も己の心の受け取め方から道が開かれるのだと説かれています。  
お不動さんと慕われている不動明王は、法華経の大曼荼羅ご本尊にも表記されており、日蓮聖人も「日蓮宗」を開かれた翌年（一二五四年）感得されており、愛染明王と共に法華経の信者を護っておられます。

仏壇に線香を焚くのは、ご神仏とご先祖への香りの供養であると同時に、生きる私達の生き方の指針でも